

御招待券

此度は劇團櫻天幕の「風雲北蝦夷地——新撰組&キムラカ AINU」の公演御招待に御応募下さいまして誠に有難御座居ました。厳正なる抽籤の結果芽出度當選致しましたので此葉書を御持参の上當日開演一時間前迄左記公演場所劇團櫻天幕入場口へ御越下さいますやうに御案内申上ます。

記

御招待人数 一組(二名迄)

御招待日 平成××年××月××日

場所 小島公園(松前藩邸跡)

臺東區小島二丁目九番地

開演 午後七時

以上

「やっぱ、新撰組が出るんだ」と、若い男が言った。

「でも、このキムラカ AINU って、謎だよ」と、若い女が言った。そう、謎なのだ。

キムラカ AINU の名前を知ったのは、もう四十年も昔、北海道にいた時のことだった。須藤隆仙という函館の坊さんの『日本仏教の北限』という本の中に、松前町の光善寺境内にあるアイヌの墓として「北蝦夷地惣乙名キムラカアエノ」の名が書かれていたのだ。

何年かたち、わたしは函館へ出張する機会を得、休暇を取って松前へ足を延ばした。

墓石は、山門を入ってすぐの池のほとりに建っていた。石の色はくすみ、文字は読み取り難かったが、それでもよく見ると、「正面の「南無阿彌陀仏」の右下にある「北蝦夷地惣乙名」に続く名はキムラカアエノではなく、キムラカアエノである」ということが分かった。「行年七十二歳」という文字もある。正面の左には、「先祖代々為菩提 脇乙名ハリ／＼ホクン」と読み取れる文字もあった。この墓石、この脇乙名(副首長)が、惣乙名(総首長)キムラカアエノたち、先祖代々為菩提に建てたものなのである。「世話人 清水平三郎」の文字は、墓石の左側面にあった。

キムラカ

嘉永元戊申年七月廿五日

同じ側面には、あの世へ旅立った年月日も刻んである。右側面と背面には、碑文と一緒にアイヌ名がぎっしりと並んでいるが、これはこの墓の建立者たちではなく、嘉永六年、北蝦夷地(現サ

ハリン)のクシユンコタンをロシアの軍隊が占領した時のアイヌの働きぶりを顕彰するものだったのである。が、それよりも五年も早く死んでいたキムラカアエノの南無阿彌陀仏の墓が、なぜここにあるのかは大きな謎だった。

アエノをローマ字書きにすれば A W E N O である。墓の世話人として名を刻む清水平三郎の耳は、そう聴いたのだろうか。が、それを A W I N O と聴いた者もいる。幕府の役人として蝦夷地にやってきた最上徳内である。彼の著作の一つ『渡島筆記』の中に、こう書かれているのだ。

自称してアキノといふ。何の義たることをしらず。アキノも亦自ら解することなし。

今は何種類ものアイヌ語辞典があり、どの辞典にも、アイヌは人間、と定義されている。

人間って何? 哲学から生物学まで、地球上の学者たちは総かりで答えを求めてきたが、最上徳内が出会ったアキノたちはそんな面倒なことをしなかった。アキノは、アキノなのだ。

アキノやアエノがアイヌになったのは、明治十年、イギリスからやってきたキリスト教の宣教師、ジョン・バチラーの力による。文明開化の彼の耳には A I N U と聴こえ、AN ANU-ENGLISH JAPANESE DICTIONARY が、彼の手によって作られたのである。アキノやアエノは、こうして消えていったのだ。

墓石のエの字を、わたしは膏薬を塗るように薬指の腹でなでた。おせっかいは止めてくれとでも言うかのように、磨り減った刻字の縁は残る力を振り絞って指の腹を引っ掻いた。

それはそうだ。村の外れの小高い丘に、杭一本を目印にして葬られるべきなのがアイヌなのだ。

杭は、あの世への旅のお伴の杖である。旅を終え、死体が土に融け込んだ時、杭もまた崩れた姿を土の中に融かしていくのである。それがわざわざ海を越え、南無阿彌陀仏などという異教の呪文の石の下に葬られてしまうとは一体どういうことなのか? 「風雲北蝦夷地——新撰組&キムラカ A I N U」という文字を新聞のイベント情報欄で見た時、これは行かなければと思っただけ、長い間、わたしが抱えていた謎のせいだった。聞いたこともない劇団名だったが、二千元という観劇料は年金生活のこちらにとってはありがたい。「各回、十組(二十人)招待」という文字もあり、まずは応募をしてみようと葉書を出したところ当たってしまったのである。

「公演場所の小島公園はさ、松前藩邸跡だつてここに書いてるけど、これって嘘なんだよね」

中年の男の声と一緒に、紙をはじく音がする。招待の葉書が指ではじかれているのだろう。すぐ後ろからの音だった。

「でもさ、新撰組の永倉新八が生まれたのはここいらだよ」と、やはり後ろからの声がする。男に見合った年齢の女の声だった。

「うん、ここいらだよ」

「ここ、ここ、一ミリの狂いもなく藩邸のこの場所で生まれましてたつて言えないよね。だからさ、小島公園が藩邸跡だつていいと思うよ。アバウトでいいんだよ」

「ぼくが言いたいのはさ、公園じゃなく、ぼくらが今立っているこの辺りが松前藩邸跡だつてこと。学校みたいな建物のこの一部から、大通りへかけてがそうなんだつてこと」

「それだつて、アバウトでしょ」

「アバウトだけどさ、事実に近いんだよ」

「事実、事実って何さ。それってケチの言うことです。ケチとはもう一緒に暮らせません」

「ちよつと、ちよつと、ちよつと」

追いかける男の声がだんだん小さくなっていった。

新撰組が、なぜ、宗谷海峡を越えた先の北蝦夷地なのかと首を傾げることはできる。土方歳三の死んだ場所は、津軽海峡を越えただけの土地ではないか。が、ヒールの音を残して去っていった女の言いつを当てるはめるならば、ロシア兵の占領に耐えたクシユンコタンのアイヌたちと、新撰組の隊士たちとは、旧体制のお役にたつたという、「ここいら」においてつながっているのだ。それは多分、この行列の人々にもつながっている。

「時刻と成り申した。御一同、お葉書をお手に、お静かに前進されよ。お静かに、お静かに!」

静かとは言えない声がとどろき、隊士が一人、また現われる。さつきとは違う顔だ。今度の隊士は、誠の幟を掲げている。誠そのものの静けさで、列は進んでいった。葉書を手にしたアバばかりである。各回十組、二十人の招待のはずだったのに、数の多さは何百人にもなるだろう。アバウトの限界を超えた数なのだが、招待される身分として、ケチをつけるのは止めるとしよう。

おお、これもまた、旧体制のお役につながる思想なのだ。

目の先には、桜色のテントが、まんじゅうのお化けのように盛り上がっていた。桜の山をかたどったつもりなのだろう。が、本当の桜の山は、桜色一色ではないはずだ。枝の下から見上げれば、花びらの間には無数の空が編み込まれ、空の上から俯瞰すれば、土や草や花見客が模様となって編み込まれているはずなのだ。美しいのは桜ではなく、桜が編み込むコミュニケーションなのだ。「御足労いただき、かたじけない」

思ひ出す事など

(冒頭)

夏目漱石

一

漸くの事で病院迄歸つて来た。思ひ出すと此処で暑い朝夕を送つたのも最早三ヶ月の昔になる。其頃は二階の廂から六尺に餘る程の長い葎簀を日除に差し出して、熱りの強い縁側を幾分か暗くしてあつた。其縁側には公から貰つた楓の盆栽と、時々人の見舞に持つて来て呉れる草花杯を置いて、退屈も凌ぎ暑さも紛らして居た。向うに見える高い宿屋の物干に眞裸の男が二人出て、日盛を事ともせず、欄干の上を危く渡つたり、又は細長い横木の上にわざと仰向に寝たりして、巫山戯廻る様子を見て自分も何時か一度はもう一遍あんな遅しい體格になつて見たいと羨んだ事もあつた。今は凡てが過去に化して仕舞つた。再び眼の前に現れぬと云ふ不慥な點に於いて、夢と同じく果敢ない過去である。

人の顔は半分も眼に入らなかつた。目禮をする事の出来たのは其中の二三に過ぎなかつた。思ふ程の會釋もならないうちに余は早く釣臺の上に横たへられてゐた。黄昏の雨を防ぐ爲め釣臺には桐油を掛けた。余は坑の底に寝かされた様な心持で、時々暗い中で眼を開いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲つ雨の音と、釣臺に付添うて来るらしい人の聲が微かながらどぎれ／＼に聞えた。けれども眼には何物も映らなかつた。汽車の中で森成さんが枕元の信玄袋の口に挿し込んで呉れた大きな野菊の枝は、降りる混雜の際に折れて仕舞つたらう。

釣臺に野菊も見えぬ桐油哉

是は其時の光景を後から十七字にちやめたものである。余は此釣臺に乗つた儘病院の二階へ昇ぎ上げられて、三ヶ月前に親しんだ白いベッドの上に、安らかに瘖せた手足を延べた。雨の音の多い静かな夜であつた。余の病院のある棟には患者が三四名しか居ないので、人聲も自然絶え勝ちに、秋は修善寺よりも却つてひっそりしてゐた。

此静かな宵を心地よく白い毛布の中に二時間程送つた時、余は看護婦から二通の電報を受取つた。一通を開けて見ると「無事御歸京を祝す」と書いてあつた。さうして其差出人は満洲に居る中村是公であつた。他の一通を開けて見ると、矢張り無事御歸京を祝すと云ふ文句で、前のと一字の相違もなかつた。余は平凡ながら此の暗合を面白く眺めつゝ、誰が打つて呉れたのだらうと考へて差出人の名前を見た。所がステトである計りで一向に要領を得なかつた。たゞ掛けた局が名古屋とあるので漸く判断がついた。ステトと云ふのは、鈴木禎次と鈴木時子の頭文字を組み合はしたもので、妻の妹と其夫の事であつた。余は二つの電報を折り重

ねて、明朝又來るべき妻の顔を見たら、先づ此話をしようかと思ひ定めた。

病室は疊も青かつた。襦も張り易へてあつた。壁も新に塗つた計りであつた。萬居心よく整つてゐた。杉本副院長が再度修善寺へ診察に來た時、疊替をして待つてゐますと妻に云ひ置かれた言葉をすぐに思ひ出した程奇麗である。其約束の日から指を折つて勘定して見ると、既に十六七日目になる。青い疊も大分久しく人を待つたらしい。

思ひけり既に幾夜の蟋蟀

其夜から余は當分又此病院を第二の家とする事にした。

二

病院に歸り着いた十一日の晩、回診の後藤さんに此頃院長の御病氣は何うですかと聞いたら、えゝ一仕切は大分好い方でしたが、近來又少し寒くなつたものですから……と云ふ答だつたので、余は何うぞ御逢ひの節は宜しくと挨拶した。其晩は、それ限り何の氣も付かずに寝て仕舞つた。すると明くる日の朝妻が來て枕元に坐るや否や、實は貴方に隠して居りましたが長興さんは先月五日に亡くなりました。葬式には東さんに代理を頼みました。悪くなつたのは八月末丁度貴方の危篤だつた時分ですと云ふ。余は此時始めて附添のものが、院長の計をことさらに秘して余に告げなかつた事と、又其告げなかつた意味とを悟つた。さうして生き残る自分やら、死んだ院長やらを兎角に比較して、少時は茫然とした儘黙つてゐた。

院長は今年の春から具合が悪かつたので、此前入院した時にも六週間の間つひぞ顔を見合はせた事がなか

病院を出る時の余は醫師の勧めに従つて轉地する覚悟はあつた。けれども、轉地先で再度の病に罹つて、寝たまゝ東京へ戻つて來ようとは思はなかつた。東京へ戻つてもすぐ自分の家の門は潜らずに釣臺に乗つたまゝ、又當時の病院に落ち付く運命にならうとは猶更思ひ掛けなかつた。

歸る日は立つ修善寺も雨、着く東京も雨であつた。扶けられて汽車を下りるときわざわざ出迎へて呉れた

つた。余の病氣の由を聞いて、夫は残念だ、自分が健康でさへあれば治療に盡力して上げるのにと云ふ言傳があつた。其後も副院長を通じて、よろしくと云ふ言傳が時々あつた。

修善寺で病氣がぶり返して、社から見舞のため森成さんを特別に頼んで呉れた時、着いた森成さんが、病院の都合上とても長くはと云つてゐる其晩に、院長はわざ／＼直接の目には無論觸れなかつた。けれども枕元にゐる雪鳥君から聞いた其文句の音丈は、未に好意の記憶として余の耳に残つてゐる。それは當分其地に留り、充分看護に心を盡すべしとか云ふ、森成さんに取つては随分嚴かに聞える命令的なものであつた。

院長の容體が悪くなつたのは余の危篤に陥つたのと略同時ださうである。余が鮮血を多量に吐いて傍人から到底回復の見込みがない様に思はれた二三日後、森成さんが病院の用事だからと云つて、一寸東京へ歸つたのは、生前に一度院長に會ふため、夫から十日程経つて、又病院の用事が出来て二度東京へ戻つたのは院長の葬式に列する爲であつたさうである。

當初から余に好意を表して、間接に治療上の心配をして呉れた院長は斯くの如く次第に死に近づきつゝある間に、余は不思議にも命の幅の縮まつて殆ど絹絲の如く細くなつた上を、漸く無難に通り返した。院長の死が一基の墓標で永く確められたとき、辛抱強く骨の上に絡み付いてゐて呉れた余の命の根は、辛うじて冷たい骨の周圍に、血の通ふ新しい細胞を營み初めた。院長の墓の前に供へられる花が、幾度か枯れ、幾度か代つて、萩、桔梗、女郎花か白菊と黄菊に秋を進んで来た一ヶ月餘の後、余は又一ヶ月餘の間に盛り返し得る程の血潮を皮下に盛り得て、再び院長の建てた此胃腸病院に歸つて来た。さうして其間いまだ曾て院長の死んだと云ふ事を知らなかつた。歸つた明るる朝妻が来て實は是々でと話をする迄、院長は余の病氣の経過

を東京にゐて承知してゐるものと信じてゐた。さうして回復の上病院を出たら禮にでも行かふかと思つてゐた。もし病院で會へたら篤く謝意でも述べようと思つてゐた。

逝く人に留まる人に來る雁

考へると余が無事に東京まで歸れたのは天幸である。斯うなるのが當り前の様に思ふのは、未に生きてゐる般の悪度胸に過ぎない。生き延びた自分丈を頭に置かず、命の綱を踏み外した人の有様も思ひ浮かべて、幸福な自分と照し合はせて見ないと、わが有難さも分らない。人の氣の毒さも分らない。

(後略)

引用原典「思ひ出す事など」大正四年・春陽堂刊
ルビを二部追加してあります。

解説

奥泉光

『思ひ出す事など』をいまさら推薦することなど、全く必要ないことだとは思ふのだけれど、いちおう念のためにすれば、これは作家として出発して以来、いや、そのずっと以前から日本語の散文を考え抜いてきた夏目漱石が書いた、最も充実した散文作品といつてよいだろう。内容はいうまでもなく、明治四三年夏、修善寺で血を吐き死にかかった経験を書いたものだが、およそ近代日本語で書かれたエッセー中、頂点をなす作品といつて過言ではない。もっとも、『猫』でデビューした漱石が、精進の果て、ついにここへ至つたというのではない。漱石は最初から完成された作家として出発したのであり、幾つものスタイルを踏破した作家の、一つの頂上であるにすぎない。とはいへ、『思ひ出す事など』が、自然主義文学成立普及の後、その成果を存分にいかしつづつ書かれた点は注目してよいだろう。漱石は『道草』等で自然主義のスタイルを本格採用したが、自然主義の技法に一番深く内在したのが本作品であり、その結果、自然主義への批評をも鋭くはらむことになった一篇は、日本語の散文の未来を照射するだけの力があると感じられる。



夏目漱石◎ Natsume Soseki
一八六七—一九一六。小説家。本名は夏目金之助。東大で教鞭をとりつづつ発表した小説『吾輩は猫である』が評判を呼び、続けざまに『坊ちゃん』『草枕』などを執筆。朝日新聞社に所属して職業作家となつて以降は、『それから』『こころ』などの作品を発表するも、断続的に胃潰瘍や痔瘻などの病に悩まされた。『思ひ出す事など』は、修善寺の大患と呼ばれた大病のさなかに執筆された作品。



奥泉光◎ Okazaki Mitsumasa
56年生。『石の生涯』(芥川賞)は小説の方法論を模索した前衛的作品と、『吾輩は猫である』殺人事件』などのエンターテインメント性の高い長篇を並行して創作。ほかに、吉野弘志・小山彰太らとジャズ・セッションを行うフルート奏者。いとうせいこうとの掛け合いが光る文芸漫談師。「文学がみられるわかる」熱血大学教授としての顔も持つ。

いとうせいこう × 奥泉光
文芸漫談 シーズン2
名著も理論もクスクスわかる、前代未聞の漫談型文学イベント。
今回のテーマはゴーゴリーの短篇小説「外套」「鼻」。まだまだ続く文芸漫談、お次は世界(文?)進出!
2006年5月30日(火) 19:00開場 / 19:30開演
開場 / 北沢タウンホール (下北沢駅徒歩5分)
料金 / 2000円(全席自由)
チケット問合わせ
K・企画 TEL/FAX 03-3419-6318

ハイブリッド・クリティク④

エコとエゴのハイブリッド

大杉重男 Osugi Shigeo

この連載の第一回の記事を書いた時、私は連載全体の題名を決めていなかった。大学から車に乗ってこれから帰ろうという時に早稲文の編集室から電話があり、題名を考えてくれと言うので、家に帰るまで運転しながら考えたが、いい案が浮かばないので困っていたら、ふと今運転している車が「ハイブリッド車」であることに思い至り、それで即席につけたのが「ハイブリッド・クリティク」である。

私は二年前にやっと普通運転免許（AT 限定）を取った。そして取った以上は運転しようと思ひ、インターネットの中古車販売のカatalogをひとわたり見て、トヨタのプリウスを買った。プリウスといっても現行のそれ（20型）ではなくて、最初の型（10型）であり、エンジンを起動すると画面に「WELCOME TO PRIUS」と文字が浮ぶ、八年くらい前のものである。この初期型プリウスは初めての「ハイブリッド車」ということで、後の型のものよりも燃費は良くなく、パワーも出ないらしいが（新しいプリウスには乗ったことがない）、私は小回りが利くのとオーディオの音が良いのとで気に入っている。

「ハイブリッド車」とは、基本的にガソリン・エンジンで走りながら、その時に出る余剰エネルギーを外に逃がさないで充電し、電気モーターを回して再利用するという仕組みの車である。つまりガソリンと電気二つの駆動力を使うということで「ハイブリッド」＝「混合」というわけである。長い急な峠道などを走ると、充電が切れて、ハイブリッドシステムが停止し（今のプリウスはこういうことはないらしい）、ガソリン・エンジンだけで走るようになるが、そんな時はいかにも片肺走行という感じで頼りない音を立てながらあえぎあえぎ登るので、この車が電気モーターのアシストがあって初めて一人前の車であるということを実感する。

大澤真幸は自動車の本性を「加速性」と「内閉性」ということに見ている（『加速資本主義論』、『「不気味なもの」の政治学』所収）。自動車の本来の機能は目的地に早く到着することであり、そのために加速をするのだが、この加速はそれ自身が享楽の対象となる。車に乗る者は常に前方の空間を自分の

ための空間として感覚するが、車を加速させればさせるほど、この未来の支配領域は拡大し、そして一度獲得したこの支配領域を減らさないためにさらなる加速への衝動に駆り立てられる。そしてこの加速のために、運転者は狭い内閉的な車内にいながら閉塞感を感じずに、世界を獲得しているような感覚を味わうことになる。大澤はこの自動車運転者の欲望の構造を、ティズニランドの体験、引いては外部を常に内部化することによって自身を駆動する資本制の構造と重ね合わせ、この加速が行き着いて外部が完全に消去された時に到達するのは「死」であると分析している。

私がプリウスに乗って経験したことも、確かにこの大澤の洞察にあてはまることが多い。加速は快感であり、そしてそれは「死」の危険の感覚によって昂揚する。しかしプリウスには同時に別の快楽の仕掛けが施されている。それは「燃費」である。私のプリウスは最新のものよりは悪いにしろ、一般の同程度のセダンタイプの車よりは本来捨てられたはずのエネルギーを「回生」して充電して再利用している分「燃費」がいははずである。そしてこのエネルギーを「回生」させる効率は、運転技術によって異なってくる。むやみに加減速せず、電気モーターを効率的に使うことで「燃費」は良くなる。かくてマニアのプリウス乗りは、一回の給油で何キロ走れるかを追求することに血道をあげるらしい。当然その運転は加速の否定、「死」の否定となる。トヨタがドライバーの心理をどこまで計算していたかは知らないが、「エコカー」とされるプリウスは、単にガソリンを食わず排気ガスがクリーンだから「エコ」なのではなく、ドライバーの「エゴ」に新たな欲望の回路を穿って、強制ではなく自発的に一種の「養生術」を習得させるところにその本質があるように見える。これはある意味反資本制であり、それ故に後のモデルチェンジではより普通の車に近づくように変更されたと聞かすが、初期型プリウスには、意図せずに制度の枠組からこぼれ落ちた実験性がある、そこが私には好ましい。もっとも自分では燃費運転はあまり心がけずに乱暴に走っているが（何しろ高速の燃費が一番良い。ちなみにこの間計算してみたら14km/ℓだった）。☞



トヨタプリウスNHW10



大杉重男 © Osugi Shigeo

65年生。主要著書『小説家の起源——徳田秋声論』『アンチ漱石——固有な批判』。

フロイトは「心」が出る

陽気で利発な初心者のための現代思想入門④

渡部直己

Watanabe Naomi

「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」——『古今集』序文のこの有名な一行を知らない人でも、まあそんなものだろうと即座に頷くだろうし、和歌に限らず、言葉の「種」が「心」だということは、さらに古今東西の別を問うにもおよばない。これほど自明な因果関係・前後関係はないと、遙か昔から人びとはずっとそう感じ考えてきたわけだが、しかし、言葉の方が逆に、「心」の「種」だとしたら!?

この逆転性にかんして、精神疾患なる具体的対象のもと、きわめて雄弁かつ挑発的な照明を当てつづけた点に、精神分析の「発明者」フロイト（一八五六一—一九三九）の、その最もスリリングな視線が存するというのが、少なくともわたしの人生に出まく、ついでに肝要事になるのだが、これは、言語表現にまつわる齟齬の感覚に立ち止まってみると、広く誰にも思い当たることやもしれない。曰く言い難いもの。何か複雑な思いを言葉にするたびにそこから漏れ落ちるもの。だが、自分の内部に何か「語りえぬもの」があるという感触を抱くのは、わたしたちがまさに「語る」からではないか、というのがフロイトの——正確にいえば、後年のジャック・ラカンによって思い切り拡大強調かつ精密化され、現代思想を刺激する——慧眼にほかならない。

《抽象的思考言語ができあがってからはじめて、言語表象の感覚的残滓は内的事象と結びつくようになり、かくして内的事象そのものがしだいに知覚されるようになった》
（西田越郎訳「トーテムとタブー」）

原始人のタブーにまつわる出典の論旨は割愛するとして、言語と心との「発生的」関係へのこの寸言を敷衍すれば、物の名などの具体的指示言語を獲得した程度の原始人や、現代人でもこれと同程度の人間には、いまだ「心」＝「内的事象」と呼ぶるものは存在しないという話になる。「愛」だの「癒し」だの「透明な悲しみ」だの、あれこれスカした言葉を覚えぬまでは、「心」も、従ってむろん、そこに作用する「無意識」もありえない。少なくとも、その傷や変調が治療の対象となるような内面性は成立しない。なにしろそれは、抽象化や観念化に伴う「言語表象の感覚的残滓」のいわば受け入れ場所として、

たのしい 革命

④

結秀実 Suga Hidemi

花咲政之輔と共同で『ネオリベ化する公共圏』などというタイトルの本を出してしまった者が言うのも何だが、現代社会を「ネオリベリズム」と規定すれば批判できた気になるという風潮には、かねがね、いさかかウンザリするところがあった。確かに、80年代のレーガノミクスやサッチャリズム以来、あるいは、中曽根民活から小泉構造改革にいたる政治・経済政策が、市場原理主義＝ネオリベリズムと呼ばれてしかるべき色彩が色濃くは否定しないし、またそれが、いわゆる「格差社会」を生み出していることも事実だろう。しかし奇妙なことに、ネオリベを批判する民主党から市民主義左派にいたる者の、それに対置するのが「リベリズム」でしかないのは奇妙なことではないだろうか。いったい、ネオリベリズムとリベリズムというのは同根ではないのか。

ここでは、ネオリベの祖と見なされている『諸国民の富』のアダム・スミスが『道徳感情論』の著者でもあるといった、よく知られた事態には立ち入らないし、ましてや、ミーゼスやハイエクの市場原理主義が誕生した、第一次大戦後のヨーロッパのコンテクストについて言及する余裕はない（後者については、『ネオリベ化する公共圏』を出すきっかけとなった事件の当事者である森元孝早大教授の大著『アルフレート・シュッツのウィーン』が浩瀚な研究としてあり、参照されたい）。

ところで、移民労働者2世3世による昨年の「大暴動」に続き、今春は、学生・労組による反CPEのデモとストライキが、フランスを席卷した。

周知のように、CPEは26歳以下の若年層全体を対象に、「2年間の試用期間中は理由なしに解雇できる」とするところの、ネオリベ的な法案である。そして、この抗議行動によって、フランス政府はCPEの撤回を余儀なくされた。日本の「リベラルな」ジャーナリズムの報道は、反ネオリベ闘争の勝利を賞賛するという論調だったといつてよい（日本に較べてフランスの学生や労働者はアクティヴだ、という次第）。大方の「左派」も積極的な支持を表明した。それは、昨年の「暴動」へのシンパシーと同様のものであった。だが果たして、そう簡単にこの度の「勝利」をことほいでよいものだろうか。両者の構造的な関連を論じたものがほとんど見られなかったことを、むしろ疑問とすべきである。事実、CPEを撤回したフランス政府が用意している新法案は、解雇の対象から学生を外し、大学や高校を卒業していない就職資格のない若年層に限るというものであるようだ。つまり、昨年の「暴動」の主体であったアンダークラスの移民労働者2世3世のさらなる切捨てによって、ミドルクラスの者の地位をとりあえず確保してやったわけだ。

反CPE闘争の現場で移民労働者の問題が論議されなかったということはないだろう。しかし、それがアンダークラスを切り捨てることで収束したということは、その「リベラルな」闘争がネオリベ的な政策に反対しているように見えて、その漸進的な実現に加担してしまっているという側面が色濃く存在していることも事実ではないだろうか。アメリカ型の市場原理主義に、フランス型の福祉主義を対置することが、何の解決にもならない理由である。リベリズムとネオリベの、このような円環を切断することこそが、「革命」の急務なのだ。



『ネオリベ化する公共圏』明石書店



結秀実 © Suga Hidemi

49年生。批評家として革命の思想に精根を傾けつつ、「そんなもの来ませんよ」と笑い飛ばしもする男。最新刊『ネオリベ化する公共圏』に関するWEBサイトは、<http://www.akashi.co.jp/osirase/neoliberal02.htm>



渡部直子 © Watanabe Naomi
52年生。小説や現代思想はもちろ
ん、「がきテカ」からサッカ―まで
を鋭く斬る批評家。増補版「不敬
文学論序説」(ちくま学芸文庫)が
好評発売中。



『夢判断』(上・下) 新潮文庫

そのつど事後的に作り出されるというのだから。物理療法・催眠療法から対話治療への一大転換も当然これに連動する。すなわち、分析医との「対話」のなかに浮かび上がる言葉のさまざまな表情(澁み、偏り、歪み、すり替え、錯綜、固執、抵抗、拒絶、等々)から、病の「原因」を探りだすこと。というかむしろ、謎めいた棘のごときその「原因」をもつ患者の「心」そのものを逆に、治療現場の(いま・ここ)に作り出すこと。この創作性は、「原因」なるものの実証性(たとえば、そのノイローゼ患者が子供のころ両親の性交場面を実際に目にしたか否か)を二の次となすまでラディカルな転倒を孕み、創作だろうとなかろうと、ともかく、そこで探り当てられたものを、自分を苦しめつづけてきた「原因」として、患者じしんが明白に承認すれば一丁上りという仕儀になる。この道筋には、もちろんヤバイものがある。過タルハ猶及バザルガ如シ！ いかん治療のためとはいえ、ここまで来るとショウミ治療じたいがまるごと病氣やんけ、という批判が生ずるわけだが(ドゥルーズ/ガタリ『アンチ・オイディプス』等)、この点については措く。ここでは、内と外にまつわる逆転的視界の脅威(驚異的な執拗さ、強靱な読解力を最大限に強調しておくべきで、『夢判断』(一九〇〇年)など、その好個の書物となるだろう)。

あまたの事例を掲げてはそのつど、内なる夢の内容以上に、それを外化する者の語彙や語り方をこそ注意深く追跡しながら「謎」の解明にいたる一著は、いわば、世界最高の推理小説集とも称すべき趣をたたえており、言葉の(しばしば、多言語的な)微に入り細をうがってやまぬその探索ぶりは同時に、きわめて良質の「テクスト分析」の観をも呈している。ここにもまた、探索過程の大胆かつ繊細な鮮やかさに比して、犯人がいつも家族の誰かで、凶器は必ずベニスという難点がありはする。が、ネクタイはベニス」といった俗流跡を絶たず、「イメージ」やら「実感」やらに頼って「心」を語る甘ったれや、言葉にたいする鈍感さを「誠実さ」と取り違えている者たちのさらにうざやめく昨今、有為の初心者には一度は手にとってもらいたい。——なお、右掲引用文を含んで、日本「近代文学」による「内面」の制作過程を解き明かした名著に柄谷行人『日本近代文学の起源』があるので併読を勧めておきたい。



COCA-COLA, GOOD BYE.

女の文学 ④

横田 創



横田創◎ Yokota Hajime
70年生。作家。「新しい生の様式」としての「女の子」の布教につとめる。「男性ファッション」など存在しない、が持論。もちろん文学も。主著『裸のカフェ』。

クレオン さあ、きっぱりと申し立てろ。お前も、この葬式の企みに荷担したと白状するか、それとも誓って写り知らぬとでもいうのか。
イスメーネー はい、私もその仕事をいたしました、お姉さまがお認めならば、いっしょの仲間で、またお役めも頂けあいます。
アンティゴネー まあ、そんなこと正義があなたに許さないわ、あなたは嫌って言ったのだし、私も仲間にしなかったから。
イスメーネー でも、私、こうしたあなたの不幸にあたって、受難のおりの、道連れになるのを、けして、恥じませんわ。
アンティゴネー 誰の仕事か、冥府の神やあの世の人が、ちゃんと知っておいでだわ、口先だけの仲好しなんて、ちっとも有り難くない、私。
(ソボクレース『アンティゴネー』訳・奥茂一)

work でも job でも business でもなく、travail という拷問にも似た産みの苦しみ、陣痛。それゆえ労作とも翻訳されるこの言葉は、日本では「とらば一ゆ」という求人雑誌のせいで転職や働き口のイメージが強くなってしまったけれど語源的には女の子の"仕事"を意味するのではないかとわたしは考えています。たとえば食事をする、それも女の子の"仕事"です。言い換えれば、ひとは食事をするとき大きな口をあけて結び目をほどき胃や腸を風呂敷包みのようにひらかななければならないから否が応にも女の子にならなければならないのです。傷口から(外へ)血を流すことも、口腔から(内へ)ワインを摂取することも皮膚の彼方へ transport [輸送] していることに変わりないでしょ? そのときわたしたちの魂は

血となりワインとなる。だから食事は楽しい。排泄することも同じです。transport [恍惚と]させられるあまり失禁したり失神したりするのは女の子ならではの"仕事"。そう書くと思い出すのは武田泰淳の『目まいのする散歩』のなかで描かれている(『富士日記』の作者として知られる)武田百合子という名の鬼姫です。といっても、彼女は「大学教授の自宅」で酔っぱらって「無意識のまま、吐きつづけ、それから座ぶとんの上におしっこをした」だけのことなのですが。人目もはばからず? 女の子なのにはしたくない? いいえ、大股びらきは女の子の専売特許です。人目を気にして自分の恥部を隠したり他人の恥部に隠れたりするのは"男である"男たちの business、女の子のなりそこないのイスメーネーのように誰々が「お認めならば」とか「けして、恥じません」とか条件ばかり並べて結局はなにもしないのです。比類なき女の子、女の子のなかの女の子であるアンティゴネーは、国の法律に触れようが触れまいが、仲間がいようがいまいが、ただ祈りにだけゆるされる沈黙のなかで"わたしの"神とともに"わたしの"仕事をするのです。私は私のシゴトを続けなければならない。早世した小説家・李良枝の言葉を思い出します(『ナビ・タリオン』)。限りあるものを、限りあるものとして、限りなく愛する神にならうこと。シモーン・ヴェイユの言葉を思い出します(『重力と恩寵』)。まだまだたくさん女の子たちの言葉があります。無条件に、そして無際限に愛した彼女たちの"仕事"が、



『アンティゴネー』岩波文庫

旧作異聞 ④



斎藤美奈子◎ Saito Minako
56年生。文学評論家。94年、「妊娠小説」で評論活動を始める。他の著書に「文芸読本さん江」「文壇アイトル論」「文学的商品学」など。

夏目漱石『坊っちゃん』、島崎藤村『破戒』、壺井栄『二十四の瞳』、石坂洋次郎『青い山脈』、灰谷健次郎『兎の眼』。以上の共通点は何でしょう。答えは主人公が教師であること。マンガやテレビドラマにも「教師モノ」は多いけれども、日本文学にも「教師モノ」というジャンルが存在するのである。
さて、そうした数ある「教師モノ」の中でも、もっとも異彩を放っていないのが田山花袋『田舎教師』だろう。
同じ花袋でも、『蒲団』の主人公・竹中時雄は、最後の最後に女の弟子が残した蒲団に顔を埋めることで文学史に足跡をとどめたが、『田舎教師』の主人公・林清三はそんなおもしろいことすらしない。あまりに輪郭がぼやけているので、新潮文庫の解説を担当した福田恆存は「『田舎教師』の主人公は林清三であるよりは、私にはそれらの田舎町の風物や生活であるようにおもわれます」と書いているほどだ。
そりゃまあ花袋は紀行文作家としての名声のほうが高かったくらいだし、本来の「自然主義文学」とはそういうものかもしれないが、それにしたって「田舎町の風物」より影が薄いといわれたのでは立つ瀬がない。
ただ、いま読むと、清三は、まるで現代の若者なのだ。
舞台は埼玉県の行田市、羽生市、そのあたり。清三は家が貧しいために進学をあきらめ、熊谷の中学を出ると同時に、三田ヶ谷村(現在の羽生市)の弥勒高等小学校の代用教員になった。しかし、彼はその境遇に満足していない。
〈若いあこがれ心は果てしなかった。瞬間毎によく変わった。明星をよむと渋谷の詩人の境遇を思い、文芸倶楽部をよむと長い小説を巻頭に載せる大家を思い、友人の手紙を見ると、然るべき官立学校に入学の計画がして見たくなる〉といった案配で、青雲の志はあるものの、カネもないし、自分でも何をやっていいかわからない。「やっぱ文学かなあ」みたいなことを考えて、二つ運だめしを遣ろう。この暑中休暇に全力を挙げて見よう。自分の才能を試みて見よう」と一念発起しても、暑中休暇は徒らに過ぎた。自己の才能に対する試みも見事に失敗した。思は燃えても筆はこれに伴わなかった。五日の後には

生と死の幻想

可能涼介

3



可能涼介 © Kanou Ryouzuke

69年生。劇詩人・批評家。『はじめのこぼれ』他。自称「21世紀の大小説」を、ネット上で連載中。
<http://www.carol-kari.jp/>

「あなたはどんなパフォーマンスをやっているんですか」と、近頃何人かに訊かれた。実はこの2年あまり、ある長いもの、を行っている。「中年学生」である。

その日暮らしの生活に疲れて手に職をつけようと思ったためか、未知の世界を覗いてみて「潜入取材」をしようと考えたためか、自分でも定かでないが、医療の専門学校に入学した。単に「心の病を持った友人が何人かいて、遊んで元気づけるのがうまかった」という思い込みだけで、精神障害者のリハビリテーションを仕事にしようと、中年のおっさんが学生になったのだ。

2年間、朝から夕方まで、週に6日学校に通い、学問の単位はなんとかすべて取得した。ところがその後の研修で（医者と違って、リハビリ界の研修は、国家試験を受ける前にある）、精神病院に2、3週間行っただけで、こちらの調子が悪くなり、簡単に挫折してしまった。

心身が乱調するとどうなるか、いい歳をして、初めて知った。いつか書く機会があるかもしれないが、中島らも著『心が雨漏りする日には』（青春出版社「青春文庫」、2005）に、近いものがある。自分を制御できなくなると、妙な動きをしてしまう様が、その本には書かれているのだ。ただ、らもさんの場合、「徘徊」するにしても東京と大阪の間を動いていたようなのに対し、こちらは、京都、大阪、奈良の間を、学生としての「定期券」を使ってさまよっていただけという違いはあるが、実家にパラサイトして学生をやっている身分では、酒に溺れることもできない。留年して研修を受け直すか中退するか、缶コーヒーで考えるだけだ。

さて、奈良をうろついていたときに、あるギャラリー（OUT of PLACE）で、出産のシーンを撮った写真展にでくわした。会場の隅で赤ん坊に授乳している女性がいて（昭和四十年代頃までは、「赤ちゃんにおっぱいをあげてい

る女性」は、電車の中などで、しばしば見られたようである。都市化（脳化）の進行とともに消えた風景の一つだろう）、2年ほど前のその人が被写体なのだった。それは、映画監督の河瀬直美さんで、話してみると、私と同じ歳なのだった。こちらが、「中年学生」をやっている間にも赤ちゃんはすくすくと育ち、河瀬さんの仕事も順調に進行していたようだった。

中年学生である私が「脳の中」をいかにさらすかを考えているのに対し、この写真展の河瀬さんは、へその緒までもさらしている。これらの写真をまとめた写真集は、一冊ごとに心をこめた豪華版にして、このギャラリーでしか売らないという。

奈良に根付いた活動を続ける河瀬さんにたいし、中年学生の私は、定期が切れれば行く先もない。「母性」を見せるあちらに対し、こちらは親がかりの「ガキ」と化している。

現実に、フリーターでもニートでも失業者でもない、「中年学生」が、いまの日本にはたくさんいる。気楽に生きてきた人もいれば、真面目に働いていたがリストラや倒産の憂き目をみた人もいて、手に職をつけようとしていたりしているのだが、思うほどには簡単ではない。死とも、幻聴や妄想とも、極めて近い所にいる人も多だろう。

それらの声（魂の叫び？）をすくいあげるのも、文学の仕事ではないか。パフォーマーとしては「中年学生」だが、物書きとしての私は、親でも子どもでもなく、「助産士」である。なんとかやってみたいものだ。♫



百々後二写真展「花母」

かれは断念して筆を捨てた。根気が続かないのである。甚だしきは、いったい何を思ったか、学校のオルガンをいじっているうちに音楽に目覚め、身の程知らずにも、上野の音楽学校を受験してしまったりすることだろう。無理だつちゅうの。小学校教師とはいえ、いまの感覚でいうと、彼はモラトリアム型のフリーターである。後に引越すとはいえ行田の実家から学校まで歩いて通うパラサイトシングルだし、（何か一つ大きなことでも為したいもんですなア）とかいいつつ、教師のバイトをしながら小説家を夢見たり、ミュージシャンもいいかも日中たり……。気にならぬ女性もいたりするが、恋愛関係にまでは至らず、そうこうするうちに貸座敷（遊郭のことね）に通いはじめ、借金までこしらえるのだから、世間知らずの若者が風俗にハマって「どうするアイフル」にしてやられる、そんな図が浮かんでくる。

『田舎教師』が発表されたのは一九〇九（明治四二年）年。『坊っちゃん』と『破戒』が発表された一九〇六（明治三九年）年の少し後である。この三作は日露戦争の時代を描いている点でも共通するが、日露戦争と『田舎教師』とのからみで重要なのは、日露戦争の祝勝会で日本中でお祭騒ぎをやっているその日に、清三が結核で死ぬことだろう。ここが『田舎教師』のもっともドラマチックな場面とさえいえる。

一九〇五年九月の祝勝会の日といえば、坊っちゃんも山嵐が、四国松山で師範学校の生徒との乱闘を繰り広げていた、まさにその日である。坊っちゃんはこの乱闘のおかげで学校をやめ、田舎教師の生活から抜け出すが、清三は同じ日に二一歳の短い生涯を閉じる。文学史上における両作品の待遇の差は、ここで決まったようなもの。『田舎教師』は実在の人物（小林秀三）の日記を元にした小説だから、モデルになった青年もこの日に生涯を閉じたのか。つたく、なんちゅう不運なヤツなんだ。

そもそも清三は、病床でも（本当に丈夫なら、戦争にでも行くんだがなア！）と口にするような、普通に愛国的な若者である。百年後のいまならさしずめ、ワールドカップに熱狂した口だろうし、自民党に投票しただろうし、小林よしのりのファンだったりもしたと思うね。ブログもやっていただろうな。あと「WB」も読んでいた可能性がある。活動らしいことは何もしていない清三が唯一かかわった活動は、友人たちの「行田文学」というフリーペーパー（同人誌）に参加したことくらいで、しかしこの「GB」（と略してしまおう）は、資金が続かず四号で廃刊するのである。くわばらくわばら。

林清三の家に財力があり、東京の帝大に入れたら、三四郎になっていただろう。せめて物理学校でも出ていけば、坊っちゃんにはなれたかも。『田舎教師』の隠れたテーマは、したがって格差社会である。身につまされちゃって、涙なしには読めませぬ。♫



『田舎教師』新潮文庫

恥を知る者は、強い

大西巨人

Onishi Kyojin

19年5月、太平洋戦争での徴兵経験をもちに描いた長篇小説『神聖喜劇』は現代日本文学の金字塔と称される。傘寿を過ぎてもみずからHPを持って新作小説を発表し続けている。

「恥を知る者は、強い。」という断章を結びとする短文（『独立喪失の屈辱』、「文化展望」一九四六年四月創刊号、大西巨人文選1、一九九六年八月第一刷）の提示が、敗戦後の私の文業公表開始であった。批評家桶谷秀昭を、かつて私は、文芸上・思想上反対の立場に立つものの、いささか恥を知る存在、「たいてい勇をたつとび死をいとはず、恥を知り信を重んじ、むさくきたなくさうらふ事を男子のせざる事と立てさうらふ習はし」のプラス面（廉恥）に幾らか所縁のある男と思っていた。

しかし、やがて私は、それがまるで買ひ被りであること・桶谷が直に恥知らず（破廉恥）に過ぎないことを思い知った。約二十五年前、桶谷は、次ぎのように書いた。

その時（新日本文学会第十回大会・筆者註）の一情景を私は思い出す。議論が紛糾して、激昂した大西巨人が詰め寄ったときの蔵原惟人の水のような冷静な物腰は、異様なほどであった。〔中野重治 自責の文学〕

「その時の一情景」は、桶谷の「むさくきたなき」妄想の所産にほかならない。そして今日、その妄想家桶谷は、左のごとく「むさくきたなく」語った。

そしていま、大西巨人。大西巨人は九州の方の新聞社にいて戦後左翼運動をしていた。だから保田與重郎なんて読まなかったかといえ、そんなことはありません。大西巨人は齋藤史という歌人——彼女は二・二六事件の時、首謀者として死刑になった栗原安秀中尉と非常に親しかったし、父親は二・二六事件で官位剥奪になった齋藤瀏とい

う、あの青年将校たちを後ろから精神的にサポートした人ですね——の『魚歌』を、愛読しています。ところが戦争終わった時に大西巨人はそういうこと言わなかった。それは言いませんよ。世の中みんな左の方へいって、民主主義イコール戦後革命というふうにつまえてたわけですからね。だけど今はもう何が何だかわからんでしよう。ソ連は七〇年で潰れましたしね。

〔国文学解釈と鑑賞〕別冊／新保祐司編『北村透谷——《批評》の誕生〕所収「シンポジウム」

敗戦後の一九四五年十月に復員帰郷した私は、同年十二月から、九州福岡市で、商業総合雑誌「文化展望」の編集にたずさわった。

「文化展望」一九四六年四月創刊号は、太宰治の「十五年間」や飯塚浩二の「アメリカ文明の批判」や阿部真之助の「天皇制への提案」やと共に、齋藤史の「こぼれ水」（短歌「視よ高く冴えし山あり艶失せし昨日のまなこをぬぐふべくあり」ほか九首）を掲載している。齋藤史の小説第一作「林檎の村」（四百字詰め原稿用紙約八十枚）は、坂口安吾の「ぐうたら戦記」といっしょに、「文化展望」第七号（一九四七年一月発行）に掲載せられた。

私の執筆した「編集後記」は、「創作欄は、坂口安吾氏のユニークな作品と共に、齋藤史氏の『林檎の村』『魚歌』『歴年』の歌人が初めて世に問う力作」云々である。恥知らずの破廉恥漢桶谷秀昭の「むさくきたなき」語り口が、火を見るごとく明白白ではないか。

（二〇〇六年四月中辭）

幻の名作長編『先駆者の道』六四年ぶりの復刻なる！

国枝史郎

末國善己編

歴史小説傑作選

稀代の伝奇小説作家による、

晩年の傑作時代小説を初集成

長中篇三作、短・中篇一四作、すべて全集未収録作品。紀行／評論一篇、すべて初単行本化。*限定〇〇〇部*

魂の完成を目指す根源的「知」の探究者たち

霊的人間 鎌田東二

魂のアルケオロジ

ゲーテ、ハッセルから宣長、篤胤……。人類の精神的営為の頂点を渉猟しつつ人間の霊性の本質に迫る刺激的労作。*1995年

不世出の天才の全貌を描く本格歴史小説！

空海

三田誠広

忽ち6刷！

鄙林の野人へ長じて大唐の天台山に渡り、惠果和尚より唯授一人の伝法灌頂を受けるまでの傳奇な生涯を描く畢生の大作。*1800部

漱石「行人」論

成盛刃心 Shunsho 精密な読解による代表作の解明！ *2900部

森達也対談集

世界と僕たちの、未来のために
定評ある長谷川宏による
待望のエンタクロバディ！ 完訳！
全31人との25の対話 好評発売中！ *1785部

長谷川宏 訳

ヘーゲル 哲学の集大成要綱(3)

精神哲学

死の前年に完成されたヘーゲル哲学の集大成。定評ある長谷川宏による待望のエンタクロバディ！ 完訳！ *5040部

1 論理学

2 自然哲学

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 佃税込
TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757

フリーペーパーなんだから、
街へ出てゲットしろ、
もしくは郵送で送ってもらえ、
俺の文章はデータじゃねえよ。

(※論集部注：モブ・ノリオ氏のe-mailより引用)

……たじろの著者の意向により、「絶対兵役拒否宣言」は紙版でのみ掲載しております。

リテラリー・ゴシック [04]

高原英理



高原英理 ◎ Takahara Eiri
59年生。主に評論家。美と憧憬の理論『少女領域』『無垢の力』の後、『ゴシックハート』を著してゴスの暗黒卿となる。合言葉は「残酷・耽美・可憐」。

ロンドンに滞在した経験のある方は御存じのことと思うが、かの地にはゴースト・ツアーといった呼び名で、半日ほどのバス旅行プランがいくつもある。その名の示すとおり有名な幽霊屋敷、怪事件殺人事件ゆかりの場所を巡るのである。街には幽霊見聞の話が多く、またそれを求めて見たがる好事家も多い。日本と異なり、「出る」評判のアパートが家賃を下げる要さえないとも聞かこれは定かではない。だがともあれロンドンには怪奇を愛する人士がこれほど多いということだ。それはあるいは、その社会の「希望の共有」の乏しさにかかわるのかも知れない。階級差別の強固さゆえ、パンクの発生したのもこの地なのである。そして既に諸人の告げるとおり、日本もいくらかは、その種の絶望的社会に向かっているように思える。

現状況が過去の蓄積によってほとんど変更不能、心底し難いものと思いついたとき、生きるだけで搾取され、かつまた自らは自分より僅かに立場の悪い者たちを搾取する汚れた存在であることをもわかった上で、ときに幽霊談や怪談のもたらず暗い情緒にもたれかかり、惨憺たる生の時間をやり過ごそうとしても誰が責められるだろう。あちらの、こちらの、立場のよい威張りたがりたちが命令し続ける営為を個が阻止するには多大の苦難が伴い、結果は常に芳しくなく、立場の逆転は稀である。とするなら、遮二無二他者に優越しようとする前向きであるより、むしろぼんやりと憂鬱な無能者であることの方が、有能な命令者たちの望む物事を遅らせ鈍らせる、いわば抵抗ともなる。だがむろん本人たちに抵抗などという意識はない。そうした無能者の友が怪奇小説であったり、お化けの漫画であったりすることは珍しくない。メランコリーは怪奇趣味と親和性が高い。そこにはいずれ共同体的たらざるをえない想像力を僅かな間だけ無駄な方向へ曲げておく喜びが

ある。

ならば同じ薄暗い場所から「魔物への親しみ」というテーマも始まるだろう。レイ・ブラッドベリの『塵よりよみがえり』という連作はゴースト・ストーリーの里イギリスの陰惨さをもう少々新大陸風なパロディの形で受け継いだ童話のような世界と言える。ここで描かれるエリオット一族は文字どおりの「お化け一家」で、実現はしなかったもののチャールズ・アダムズとブラッドベリとで合作をなす案もあったと言う。連作の発端となった一篇は短篇集『10月はたそがれの国』に「集会」という題で入っていたものだ。かつて戸口の前に捨てられていたため、エリオット家の一員として暮らすことになった人間の少年ティモシーは、不死の魔物である他のメンバーと異なり、限られた生しかなく、超能力も持たない。闇に棲む一族にあわせることの難しい彼を、家族はそうした個性として見守っている。世界中から一族が集まる「集会」の日、遠方からやってきた、背に翼のあるアイナー（『10月はたそがれの国』の表記ではエナー）叔父は、自らの無能力を悲しむ彼をなぐさめる。この叔父はまた人間の女性と結婚して子を養い家庭生活を営む父でもある。

闇の物語を愛する意識には、色褪せた古い写真のような記憶の彼方で死体や魔物とともにまどろむ無時間への渴望がある。その型に嵌まった「怪奇趣味」を滑稽と笑うことは容易いが、さりとして彼らの棲まう闇を払拭するに足るほど光度の高い希望などもはや誰も手にしてはいない、違うだろうか。



『塵よりよみがえり』河出文庫

教えている大学や大学院のシラバスをばらばらと見ていて気づいたのだが講義名に「方法論」と題されたものが殆どない。あるいはほくが教えている大学だけかもしれないが、ほくが学生の頃は「民俗学方法論」とか「史学方法論」といった課目が「概説」とは別に必ずあった気がしたからだ。このころほくは批評めいた仕事は「憲法」その周辺に限定して、まんの仕事も半分ほど整理して大学で教える仕事（といったところで非常勤講師二つと専任一つでまんの連載一本分にも満たない）を増やしている。教えているのは民俗学や物語論及びまんが史といった名目だが、ほくの感覚としてはどれも「方法論」と呼ぶのが一番、しっくりくる。講義名は大学が文部科学省向けに適当に作ったものだから知ったこっちゃないが、ほくの関心はその領域の「方法」を歴史的に検証して、現在の「方法」の起源を考えることにある。例えば柳田國男の民俗学と田山花袋の文学がいかにして「自然主義」という方法を共有し離反したかがほくの「民俗学」の授業だし、「物語論」はプロットのフォルマリズムがいかに映画産業の中にストーリーテリングの方法論として回収されていったかの検証である。まんが史は、まんの非リアリズム的作画法・映像的手法・内面表現の三つの方法の起源と変遷を追うもの。特に物語論とまんが史は映画やまんがの創作論を実践的に教える前提として行なっていて、自分達の「方法」の歴史性や政治性を知った上で初めてそれは使つていいものなのだ、とほくは考える。民俗学も含めてほくの専門領域は大衆動員の技術として極めて使い勝手の良かった過去をかつての戦時下に持つ点で、翼賛小説でも書いて軍部の顔色をうかがうしかなかった文学とは「方法」が持っているリスクの大きさが決定的に違うからだ。ほくには耳慣れた「方法論」の授業とは「方法」の歴史性や政治性を説いて、その下位に来る具体的な技術や手法を上位で律するものだったように思う。ほくは手塚治虫の方法も含めあらゆるおたく表現の領域でその方法の起源と進化がかつての「戦時下」にあったと繰り返し語っているが、しかし同時に、そのような「方法」によってほくたちは何かを語らなくてはならない。けれども大学にいくようになって思うのは、大学も学生もあらゆる意味ですぐに使える技術の習得に目がいつていることで、別に大学が就職予備校化するのは構わないが、「技術」は「方法」という上位概念がないと実は使えないんだよな、

大塚英志 翼賛下の批評4

Otsuka Eiji

翻 訳 の ア し か コ し か

③

青山南 ◎ Aoyama Minami

49年生。とりあえず翻訳家、ときたまエッセイスト。翻訳に『血の雨』(コラゲッサン・ポイル著)など。著書に『南の話』など。



アーサー・ビナードは、このところ、『日本語ぼこりぼこり』や朝日新聞に定期的な書いている「日々の非常口」等、エッセイがだんぜん目立っているが、もともとは詩を書く人である。どちらも日本語で書いているが、英語が母語だ。学習した日本語で書いた詩集『釣り上げては』で中原中也賞を受賞した。「ことば使い」という短い詩一編をみても、たいへんな日本語使いであるのがわかる(①)。

なんで英訳のことなど考えたのかというと、中原中也賞は受賞作の詩集を英訳して出版するのがご褒美になっている賞なのだ。主催は山口市で、英訳版の版元も山口市である。ビナードまでは、受賞者は日本人ばかりだったから、英語を母語とする人間が英訳していた。ビナードは英語が母語だ。さあ、どうするか、ということになり、結局、本人が英訳した。(作家のリービ英雄にその話をすると、「どんな名医でも、自分の身体に手術を施すことは不可能だ」と忠告されたそうだが。) 英訳版のタイトルは *Catch and Release*。

- | | |
|---|--|
| <p>① 「吠えろ」と怒鳴り
「芸になってない」と鞭打つ。</p> <p>一行の
輪抜け跳びを
何回もさせる。</p> <p>いくらおとなしく
馴れているようでもやつらは
猛獣。</p> | <p>② “Speak!” I command,
and when they won't,
I crack my whip.</p> <p>I make them line up, roll over
and jump through the hoop
of a conclusion.</p> <p>No matter how tame
they may seem, remember,
at any moment they can
turn on you.</p> |
|---|--|

「猛獣」ということばが鮮烈な「ことば使い」は“Words”に、本文はつぎのように翻訳されていた(②)。

うまい訳だなあ、と感心した。とくに「一行」を“a conclusion”にしているのには絶句。「結論」という訳語で知られているこの語だが、「いろいろ考えた末に出てくるもの」というのが本来の意味だから、いろいろ考えた末に出てくる表現としての「一行」にそれをつかうのはうまい。とてもほくには思いつかばない。感嘆した。

しかし、どこか落ち着かなかった。「芸になってない」が消えてしまったことも気になるし、だいいち、「猛獣」という衝撃的なことばがなく、「跳びかかってくる」という意味のことばに変わっている。

それに、タイトルが“Words”になってしまったせいだろうか、詩ぜんたいが、「猛獣のようなことば」にポイントが移っているような印象がある。「猛獣のようなことばを相手にする者」がポイントではなかったのか。

作者とて、作品を書いてしまったら、あとは一読者である。この英訳は「ことば使い」という日本語の詩に触発されて書いたもうひとつの恐い詩である、と理解したい。しかし、「ことば使い」という詩、「翻訳」というタイトルにしてもよさそうだな。

初めてこの詩を読んだときは、最後に待っている「猛獣」という一語に打ちめされた。すべてがこの語でビシッときまり、ことばがおそろしい生き物であることをパワフルに伝えている。しかも、そのことばはタイトルの「ことば使い」とつながっていて、サーカスの「猛獣使い」という言い方を連想させるようになっていて、完璧だ。もしもこの詩を英語に訳すとしたら、ぜひ「猛獣」がポイントだな、とおもった。



大塚英志 ◎ Ooyama Eishi
58年生。まんが原作者。文壇的文学は知ったっちゃないが、親切にも読者が正しく「文学」と出会うための入門書『初心者のための文学』を7月に出す。

とは思う。
かつての翼賛下、まんがの方法を「進化」させてしまったのは軍部からの「まんがも科学的たれ」という要求に対し、ただ科学的啓蒙の道具にまんが技術を使わず、まんがが表現そのものの「科学化」、つまりリアリズムの徹底した導入という方法論上の変革を行なったからだということも各所で記したが、その変革は主として中村書店の子供まんがの領域で生じたことで、それが生じなかったまんが家たちも少なからずいる。それがプロレタリア芸術運動の一領域としてあった風刺まんが系の描き手たちである。例えば昭和一〇年に中野重治、小熊秀雄と「サンチヨ・クラブ」を結成したこともある加藤悦郎は昭和一七年『新理念漫画の技法』なるまんが入門書を刊行しているが同書を読んで思うのは、彼ら「転向」したまんがの描き手たちに技術の変化が何故起きなかつたのかということだ。加藤は「漫画家は思想戦における一戦士である」といさましい。「昭和の初期以後におけるわが漫画界は、全く、おのれの国籍を忘却していた」とかつてのプロレタリア芸術を標榜したまんがを批評し「大和民族としての誇りと伝統にめざめ」よと説くあたりなどは今の「ヲタ・ナシヨ」と変わりなく微笑ましい。しかし加藤のまんがの定義は「国家・民族の意志をもって、世界のあらゆる不正・不合理・不自然・不調和なものに対して警告を発し、またこれを積極的に攻撃する」ことにあり、「民衆の意志をもって」が「国家・民族の意志をもって」に変わった、つまりプロバガンダの中身が変わっただけで、加藤は「戦時下」を方法——技術の作り変えとして受けとめていない。その結果、彼がまんがの技法として前面に出すのは「誇張」つまりカリカチュアライズであり、大城のぼるら児童まんが家が「誇張」||「記号」からリアリズムへと方法の作り変えをしたのと対照的だ。その結果、風刺まんが的な領域は戦後、一挙に戦時下の技術革新を戦後に持ち込んだ手塚治虫によって圧倒されるのである。創り手の「方法」意識は戦時下でさえ表現を進化させてしまうことは藤田嗣治の戦争画や「FRONT」の写真家にも見出せる。創り手はそれ故「方法」の水位で表現に敏感でなくてはいけないし、「方法」の変化を外部のいかなる力が求めているかをとらえられなくてはならない。
ということも実際に「方法」の歴史をたどると、自分の「方法」の起源と政治性を知り、それでも尚、何かを創ることではか身につかないので、それを「文学」以外の創り手には伝えておこうと割とまじめにしばらくは教壇に立つつもりである。

小説家・シナリオライター養成コース

2006年4月スタート！

体験入学開催中

なりたいやつ求む。

UBDC
www.ubdc.ac.jp

宇都宮アート&スポーツ専門学校は、WBの刊行を支援しています。

宇都宮アート&スポーツ専門学校

● 声優・アナウンス科

声優タレント養成コース／俳優養成コース／アクション俳優養成コース／アナウンサー・DJ養成コース

● スポーツビジネス科

スポーツインストラクター養成コース／スポーツトレーナー養成コース（07年度新設予定）／スポーツビジネスコース

● マンガ・アニメ科

マンガ家・コミック養成コース／アニメーションコース

● 芸術・デザイン科

イラストレーター養成コース

● 文芸創作科

小説家・シナリオライター養成コース

宇都宮ビジネス電子専門学校

● 電子情報処理科

電子情報処理コース／プログラマ養成コース／SE（システム・エンジニア）養成コース／システムアドミニストレータ養成コース／ゲームクリエイターSコース（07年度新設予定）／ゲームクリエイター養成コース／CGデザイナー養成コース／Webデザイナー養成コース

● 経営情報科

大学Wスクール（SE養成）コース／大学Wスクール（IT経営）コース

● 医療秘書科

医療事務養成コース／医療秘書養成コース／病棟クラーク養成コース／医薬（ドラッグ）ビジネスコース

● 幼児保育ビジネス科

保育・幼児・チャイルドマインダーコース

● 情報経理科

税理士会計コース／経理事務コース

● 公務員ビジネス科

公務員（三種・初級）コース／警察・消防・自衛官コース／郵政・鉄道コース（07年度新設予定）／政治家秘書コース

● セクレタリー（秘書）情報科

オフィス事務職養成コース／一般事務職養成コース／パソコンライセンスコース

● 経営ビジネス科

販売職養成コース／経営ビジネスコース／プライダルコーディネーターコース／ホテルビジネスコース

UBDC 総合

[住所] 〒320-8533 栃木県宇都宮市大寛1-1-1 ユニオン通り（宇都宮の原宿）

[TEL] 028-635-3211（代）

[FAX] 028-635-3210

[E-MAIL] アート&スポーツ art@ubdc.ac.jp

宇都宮ビジネス電子 bijiden@ubdc.ac.jp

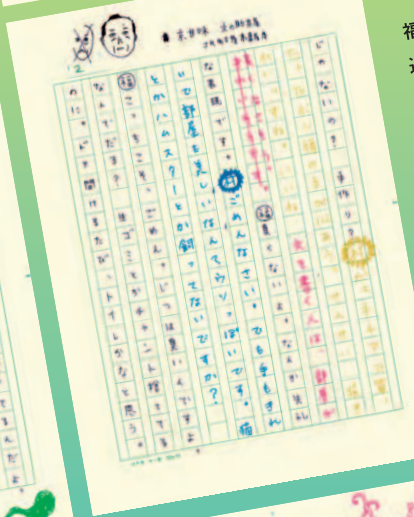
福永信の京風対談

Fukunaga Shin

72年生。作家、「読み終えて」でリトルモア・ストリートノベル大賞受賞。
『アクロバット夜更』『あっぱあっぱ』。

「ゲスト」**村瀬恭子** Murase Kyoko
63年生まれ。画家。この春、森の中を彷徨う少女を鳥かじを覗き込むように描いた個展『月と森とシダの下のたつむり』（タカシイシギャラリー）を開催。

JR名古屋駅タカシマヤ六階京風味文の助茶屋 一編



村瀬★福へ。ハーブミストの香りのボールペンです。におう？/福永
★トイレの感じがすばらしく見事に再現されているよ。村らしいね。ア
トリエの感じがすばらしく見事に再現されているよ。村らしいね。ア
（→これは、アジアンミックスの香り。アジアン…って、米とかみそと
かキムチとか？ でも、この色は、結構くさい。やりすぎだ。大人の女
の香り？）アトリエは、絵を描く時に使っているテレビンの匂い。体に
悪いです。指もボロボロになるよ。福は、やっぱりペンだこ？/福永
★ないよ。そんなの。美しいもんだよ。まああまり書いてないからだ
が……。いい指輪してるじゃないの。それ、おれの方が似合うんじや
ない？ 手作り？/村瀬★ヴェネチアで買った。たぶん福の方が似
あう。せんせい、指さけいっすね。いいね。文を書く人は、部屋がき
れいそうです。くさくさそう。/福永★臭くないよ。なんか失礼な
表現です。/村瀬★ごめんささい。でも手もきれいで部屋も美しいな
んでウソっぽいです。猫とかハムスターとか飼ってないですか？/福
永★こっちこそ、ごめん。じつは臭いんですよ。なんでだろ？ 生ゴ
ミとかチャント捨てるのに。ドア開けるたび、トイレかなと思う。

福永★この感じ……なつかしいな。こんなふうに文字書いて、FAXで
送りつけてたんだよね、『あっぱあっぱ』を作り始めた最初の頃っ
て。/村瀬★そうだね。もう2年過ぎたね。けど、今は目の前にいるよ。
抹茶シフォンパフェを挟んで。/福永★うん。不思議な気がする。デ
ュセルドルフと京都でガーッとFAXのやりとりして（その後メール
も使うようになったけれど）、あとはそれぞれ一人の作業だったわけ
だ。描くのも、書くのも。書きかけのものを送って、お返事もらって、
文字の世界、FAXの紙の世界、パソコンの画面のなかで出会ってきた
わけだ。今だって似たようなもんだね。/村瀬★そー。全然違うよ。
すごく緊張する。二人ともきつと口の中は抹茶味だし、福が紙をわくる
カサカサという音も聴えるし。ボールペンは匂ってるし。/福永★いや、
それでも、一緒に絵を描いて遊んでいるのに似ているね。/福永★いや、
全く違うね。こんなに近くにいて一緒にいる気がしない。ほとん
どしゃべってないし。やっぱり紙の上で出会ってるんだよ。いや、それ
とも気があわないのか……うすうす……。/村瀬★分かってない！！
一緒にいるって言ってるの！話さなくても同じ場所にいるって言う
るの〜。やっぱり気が合わないのかなあ。それにしてもこのセルフま
まいこというなあ。いやほんと、あの本が出来るまでのあいだね、村
のことずっと、考えていたから。村ってどんな人かあつてね、思っ
たから。直島で初めて絵を見てさ、すごく感動して、この画家のこと全
然知らないけれども、なんかわかる、言葉はなくて、絵だけがあつて
本人がいるわけじゃないけど、もう話しかけている……そこからあの
本はスタートしたし、あの本全体が僕から見れば、村とのおしゃべり
だから。/村瀬★あつてなして又、そんな。また緊張してしまいます。う
ん、言葉って難しいけれど、いいなあ。

筆談を終えて

来日中の村瀬恭子さんと筆談した、名古屋駅で、二年ぶりの再会
になる。個展『月と森とシダの下のたつむり』、そして同名の画
集の出版にあわせての来日である。じつは、われわれは、数える
ほどしか面会したことがない。一緒に仕事をしたわけだから、ひ
んばんに交渉はあったが、それはおもに文字や画像によってだ
った。そのファクスやメールでは、おたがいのことを「村」、「福」
と呼びあっていた。筆談でも自然とそうだった。
出会うきっかけは、僕が手紙を書いたのである。いっしょに本を
作りたいて、というふうには、瀬戸内海に浮かぶ直島で、島全体
を使った展覧会『スタンダード』の出品者の一人だった。物語を
まったく感じさせないその作品群を見て、壁に直接描かれた後ろ
を向いた女の子の赤いながい髪がながい細い枝にからまるその
絵を見て、まだどんな人か知らないのに、この画家と仕事した
なと思ったのである。だから、出会いの最初から、文字だった。
いや、村瀬さんの作品が僕に手紙を書かせたのだから、最初に、
絵があつたのだ。あるいは、絵と言葉が、そのときすでに、出会
っていたといえるかもしれない。

★
【重松】 武道とかで、肉体で世界と直取引しちゃった人間の大変さが、藤沢さんにはあるんじゃないですか？
【藤沢】 小説は俗な人間を書かなきゃだめだと40過ぎに気づいて、自分にとって俗って何だろうと考えると、やっぱり究極、身体性しかないんです。身体で感応するものとか、暴力とか——ただけど、それをわかりながら、どこかに純粹言語への希求もあるんだよ、恥ずかしいんだけど（笑）。
【重松】 すごく失礼で不吉な言い方だけど、病気になるら変わるとな気がしませんか？

【藤沢】 ああ、それはあるんでしょうね。本当言うと、身体ってないほうがいいんだらうなと思うこともあるし。

【重松】 逆に、言葉のほうが邪魔になることもありうる？
【藤沢】 ありうる。風に揺れてる草や、葉の先に溜まっている雫を書きたいとき、言葉で書きたいというより、自分がその雫そのものになりたいんです。身体も言葉も消えて雫になりきったら書かなくていいんだ、って思うんだけど、それでもまた書いちゃう。無を希求しつつも、無が怖いというか世界を繋ぎ止めた自分かいて、その手段かもう言葉しかないんでしょうね。

【重松】 藤沢周の官能小説って「頭が勃つ」んですよね。肉体を書けば書くほど観念的になる。

【藤沢】 官能でも結局、言葉を扱いつつも言葉では捉えられないものを表現しようとする矛盾を抱えていますよね。そのとき、いちばん簡単な道は「獣になる」ことだと思ったんです（笑）。自分の慣れ親しんだ、人間としての、男としての感覚を壊してしまおうという。だから、ホルノグラフィックな身体を書こうと思っても、逆説的になにか観念的になってしまう。

【重松】 藤沢さんは抹消したい過去かもしれませんが、藤沢周の「周」がカタカナだった時代に同人誌に発表した、地面に向かってマスをかく小説があったじゃないですか。「ぶっかく、ぶっかく、ぶっかく」とか連呼する。

【藤沢】 「えん」という同人誌かな、それは。あれは「憑坐覚書」という作品だね。それとも、「尖」という法大生時代に作った同人誌の、「トウキョウの空は…」だったか。

【重松】 いまの話聞いてわかったんだけど、大地とセックスしたかったんですよね、あのとき。

【藤沢】 世界を捉えるときに、耳の後ろで捉えちゃうんですよ。獣のやりかただと思うんだけど、気配として捉えているわけです。見るとか嗅ぐとか聴くとかが統合されてくちゃくちゃになって、再生するときも、そういう表現になっちゃう。

【重松】 だけど、そうすると、日本語として、散文としての態を成さないかもしれない。本当に、詩でも絵でも音楽でもいければ、もっと楽に表現する道はあったんじゃないですか？

【藤沢】 こんなだらしのない男なのに、唯一潔癖なところがあるとすれば、「世界を認知するのって言葉しかないだろう」と思っている点。それを手放せないところが、ガキなんだけれど（笑）。本当に大人になれば、「あ、もう俺文学やめた、坊主になるわ」といいと思うし、全然違う商売やってもいいんだけど、どうしても言葉にかかわってしまうんだよね。

★
【重松】 芥川賞を取って8年。もっと、腕だけで小説をでっち上げられるスキルとか、割り切りを持ってると思ってなかったですか？

【藤沢】 思ってた。でも、余計に大変だったよ。

【重松】 やっぱり、進んじゃったんですよ、ケモノ道。

【藤沢】 そうだと思う。俺は鎌倉に住んでるんだけど、学生時代には、鎌倉って文士がたくさんいて、いかにもブンガクブンガクした、嫌な土地だと思ってたんです。なのになんでいま鎌倉にいるんだろうと考えると、自然（じねん）をものすごく感じやすいところだからなんです。それを、魂としかいいようのない、人間から解き放たれている部分、ケモノの部分で捉えているんだと思う。文学って、要するに、獣性だから。

【重松】 中上健次だったら、紀州っていうトホスがありますよね。新潟の内野

町には、そういう宗教的な土壌はあったんですか？

【藤沢】 まったくないですね。漁師町で割烹町で芸者さんがいて。そういう町の中で俺は、「新川」って川を一日中眺めていた。だから、新川に跳ねている光については、たくさん言葉を知ってるんです。なにもないが故に、ただ目の前にあるものを細かく見る、匂いとして感じ取る力は育ててくれたんだと思います。宗教とは対極、ひたすら、ケモノ（笑）。

【重松】 その感覚にいちばん近いのが、禅仏教だったわけですか？

【藤沢】 そうですね。4、5歳で新川をずっと見ていたときには、川面に反射する光自体になろうと思っていただけです。それがすごく気持ちよかったです。

【重松】 よく飛びこまなかったですね（笑）。

【藤沢】 ねえ。でもたぶんそれは、禅仏教という座禅や瞑想、つまり自我を落として対象になりきって遊ぶことなんです。だから飛び込んだようなものかもしれない。

★
【重松】 今日の話をもう一つ思い出したんですが、藤沢さんのいちばんいい読者は、「世界はいま目に見えているものだけでいい」という生活をしている大人じゃなくて、いま教えているような、それをどう掴むかに苦しんでいる若い学生たちじゃないですか？

【藤沢】 そうですね。と同時に、自分自身がさらに子供になっていきたい。まだ息子が2歳くらいの子、鎌倉の山道を手をつないで歩いていて、山の本が風で揺れたんです。同時に二人で「おおーっ」と声をあげた。俺は風で言葉を知ってる。彼は感触としては知っているけど、言葉としては知らない。「木が生々しく動いた」ことを、獣として見ているのね。そのとき、「俺は言葉が使えることによって、逆に世界の実相から遠ざかっている」と思ったんだ。学生たちも、いままて言葉で教え込まれてきた世界を、疑い始める時期なんだよね。だから、彼らの逡巡とか、暴力とかの感情の表出は、切実に迫ってきますね。

【重松】 だったら、やっぱり大学で教えてよかったじゃないですか。教壇に立たなかったら、18、19、20歳くらいの子って、いちばん接点がないでしょう？ だから、正しい意味での「青春文学」の書き手としての藤沢周には、大きなアドバンテージになってるんじゃないですか？

【藤沢】 そうかもしれない。大学で教えるのがなんて嫌かっていうと、正直言って、若い奴らと一緒にいるのが面倒くさいんですよ。「プライド噴出させやがって、この野郎」とか「こんなところで悩んで停滞してるのかよ」とか、いろんなことを考えているのが、ひとつひとつ自分のことみたいにわかりすぎて。それがなかったらもう少し楽な仕事なんだけど、いちいち細部まで響いてくる。逆に言うと、彼らが俺を慕ってくれるのは、「このひと、わかってんたろうな」とってことなんだと思うんです。

【重松】 なんか「魂のヤンキー先生」みたいですね（笑）。でもたぶん、「世界をどう獲得するか」について、ほくたちの世代よりもいまの連中のほうが、はるかに切実だと思うんです。だから、このインタビューを読んで、「藤沢周は最近おじさんの話が増えてきたけど、根っこは同じだ」というのが伝わると思いますよ。

（構成・青木誠也）



『フェノスアイルス午前零時』
河出文庫



『死亡遊戯』
河出文庫



『第二列の男』（最新単行本）
作品社

頭が勃つんですよね

俺、18の頃と変わんねえじゃん

(藤沢)

非常にかかわりがある……そういう実践的なことを話すと、学生は急に目を輝かせ始めるんだよね。

【藤沢】いまの大学生は、いわゆる援交世代じゃないんですね。その後のリスカ世代、外ウー世代でしょうか。その影響はありますか？

【藤沢】いまの大学生は金原ひとみさんくらいの歳だけど、彼女の『蛇にピアス』は、我々の考えていた外ウーとかピアッシングとは違うんですね。我々のときは、部族主義的なもの、トライバリズム。「チーマーはこういうタトゥーを入れなきゃだめ」とか記号としてあった。彼女たちはもっとプリミティブでしょう？

【藤沢】でも、それって藤沢さんが描く身体性と似ていませんか？

【藤沢】そうですね。『刺青』に出てくる彫師の彫阿弥は、「刺青なんて表層の戯れに過ぎない」と思ってる。だけど、主人公の少女アヤはもっと切実で、「自分がここにある」刻印として刺青を選ぶ……そういう部分では通じていると思います。

【藤沢】学生たちは『刺青』とか『SATORI』を読んでいるんでしょうか？

【藤沢】読んでない、と思う(笑)。俺の教えている経済学部は他に読まねばならないのがゴマンとあるらしくて(笑)。ところが、経済学ってすべてを数量化して論理的に詰めていくから、逆に数量化できないものに敏感なんです。『人間の感情』とか、たとえば、非論理的なんだけど世界の底に届いているような小説の1フレーズを提示すると、すく反応する。

【藤沢】その学生たちの感覚が、藤沢さんの小説にフィードバックすることはありますか？

【藤沢】10代の登場人物であれば、やはり今の彼らを書かざるを得ないですね。同じ身体性でも、俺たちは身体性でダイレクトに世界と対峙していたんだけど、彼らは守られているというか、身体性を重んじつつもその「観念の身体性」が薄い。いや、むしろ、「身体の観念性」と言った方がいいか。

【藤沢】その観念はなにかかちつったんでしょう？

【藤沢】なんだろう、情報資本主義的なのかな。

【藤沢】情報資本主義でできあがった観念って、観念っていう単語を使っちゃいけないくらいに安いものですよ？

【藤沢】その安さになじんでラクに生きてる学生達もいるけど、拒絶反応を示す奴もいる——そういう奴らが、表現のほうにいんだらうな。

★

【藤沢】その一方で藤沢さんは大学で教えたはじめてのころから、自分と同世代の焦燥を書くようになって、青春文学的なものを禁欲しているようにも見えますが。

【藤沢】そのふたつは、通している気がするんです。17、8のころは、エッジの上に立ったような感じだった。いかに生きたらいいか、その一歩を踏み出せないと言うのかな。それが、エッジからエッジへ飛び移る技を覚えて社会に出たら、「日常なんて楽勝だな」って。ところが40過ぎて立ち止まったときに、グサッときて——単にエッジが剣山みたいに集まっていただけで、俺、18の頃と変わんねえじゃん、って。

【藤沢】エッジとエッジの間隔が狭まったから、その結果、ふつうに歩いてもOKに……。

【藤沢】なったのかもしれない。自分が17、8で世界を疑ったころと変わってないと気づいて中年の日常性を扱うようになり、美とか魂という言葉でしか表せないものがあるんじゃないかと、また思ったわけです。一巡して戻ってきたような気がするんですね。

【藤沢】大人の日常がはいることで、「退屈」ができるようになりましたよね。藤沢さんの小説って、前は「一行たりとも退屈したくない」感じがあったけれど、今は、主人公の日常的な「退屈さ」を積極的に入れている感じがします。

【藤沢】そうですね。ひとつの所作をいちいち逡巡して、確かめるといって鈍重さが出てきたからかもしれない。日常が粒子状に細かいところまで見えてくるよう、停滞してでも、空間をもっと細かく、微分して入れたくなるようになってきた。

【藤沢】『箱崎ジャンクション』も、初期の藤沢周ではありえない停滞、退屈、焦燥ですよ？ 皮膚の中でブツブツはしけて、まだ破かない、まだ破かない、それが、ボンッと破れた瞬間に、動きだす。

【藤沢】『箱崎』は典型的ですけど、ドラマはいくらでも可能なんです。いかにそれを起こさないかで、ずっと我慢してた。それが日常なんじゃないかって気づきはじめてます。

【藤沢】藤沢さんは芥川賞を取った頃に、「テカタンをやりたい」とおっしゃってましたけど、またそこには行ってないんですね。

【藤沢】まだですね。皮膚、というか、魂の中でとんとん腫れる状態。

【藤沢】退屈を書くことによって、深めていくという道を選んでいる。

【藤沢】退屈って、つまり、あるがままで「ここにある」状態ですよ。小説だと、つねに読者はカタルシス的なものを求めるんだけど、そこに逃げるのは嫌なんだよね。もっと鈍重に、したたかに、徹底的に見たほうがいいと思う。

【藤沢】その意味でいうと、藤沢さんの一番重要な作品は「海で何をしていましたか？」だと思います。あそこにあるのは、「完全なる、停滞した不穏」じゃないですか？

【藤沢】俺、書くの早い方なんだよ。100枚を3、4日で書けるんだけど、「海で〜」はたった30枚なのに3カ月かかたんです。しかも、途中狂いそうになった。自殺しようかとか、もう小説書くのやめようかとも思った。やっぱり、18歳の頃になりきったという部分がある。

【藤沢】ヘヴィーだった時代ですね。「海で〜」のすこみって、裸で海にいた18歳の彼の日常が不穏に負けて潰れていくんだと思っていたら、実はふりかえる40代の自分が、とんとん静かに不穏さを増す点ですよ。普通の回想小説とは逆のパターンなわけで、それはすこみキツイだろうなと思いました。その意味でも、おそらくあの小説は30枚以上にはなりえないでしょう？

【藤沢】なりえない。30枚で、40代の自分がとんとん崩れて、流れて、だけど爆発もおこさない。静かに狂うところまでいった——それを書き上げたときに、世界すべてを何でも書けると思ったよ。その世界は、物語ではなく、ただ「そこにある」だけ。たぶん読者は、ものすごい退屈だと思ってる。だけど、その1つ1つが、突き刺さってくるような感じだったんです。

★

【藤沢】ほくは藤沢さんが小説でやろうとしていることに、憧れと尊敬と共感を持つんですが、逆にいえば、だったら言葉じゃない道もあり得るんじゃないですか？

【藤沢】俺、このまま進んだらたぶん俳句に行って、それから禅僧になるかも。世界の実相を書こうと思って言葉を使うんだけど、使うほど離れていく気がして、なにやってんだらうと思う部分があるから。だから、俳句のような、言語構造を脱却させる表象を選ぶかもしれない。散文を書くことによって、無のトボスを人間のあいだから浮き上がらせる望みもまだ残ってるけど、言葉じゃないところにいっちゃうかもしれない。

【藤沢】藤沢さんがボン引きやタクシーの運転手という、ある種の俗な世界を描くっていうのは、言葉を結晶化させないための、延命策なんだと思います。純度を高めていくと「海で〜」になるだろうし、これを続けると、本当に言葉を捨てる瞬間が来るかもしれませんよね。

【藤沢】だから、自分の核にあるものは詩だという気がしている。

【藤沢】もともと、詩もお書きになっていましたよね。

【藤沢】(デビュー作の)『死亡遊戯』も、初めは、ほぼ詩のイメージだったんです。なんてボン引きを選んだかという、仲間内だけに通じるまったく違う言語を持つから。ということは、我々散文の地図とはまったく違うマップがあるだろうからと、戦略的にね。俗を持ち込みながら、詩に近いものが出てくるんじゃないかと思ったんです。だけど、言葉が結晶化して、とんとん短くなって、「海で〜」みたいに言語がなくなっていく恐怖感があります。目に見えない、言葉にできない感覚を言葉にしていって矛盾にさらされて、いったい自分のやっていることは何なんだらう、と。そんなことを考えないで書いていけば、本当に成熟したプロになれるだろうけど……。

藤沢周◎ Fujisawa Shu
59年生まれ。躍動する物語と沈降する内面、動と静をあわせ持つ小説家。98年に『エノスア イレス午前零時』で芥川賞を受賞。NHK「B'Sブックレビュー」の進行役を務める。法政大学の教授職も務めるなど、多彩な活躍をみせている。



早稲田文学

WEB

¥0

- 向井豊昭
- 大西巨人
- 渡部直己
- 絃秀実
- 奥泉光→夏目漱石
- モブ・ノリオ
- 青山南
- 可能涼介
- 福永信+村瀬恭子
- 斎藤美奈子
- 藤沢周+重松清
- 高原英理
- 大塚英志
- 大杉重男
- 横田創
- 国木田独歩



楽しい文学

Wonderful BUNGAU

【藤沢】藤沢さん、法政の教授になって何年目ですか？
 【藤沢】三年目。なにを教えたらいいかわからないし、教えることも嫌
 いったんだけど、大学時代の恩師に頼まれて、しぶしぶ引き受
 けたんだよね。
 【藤沢】専任の教授になると、コマ数も多いでしょう？
 【藤沢】日本文学、文章表現、日本文化論と、ゼミが2コマ。そのう
 え今年から「入門ゼミ」ってのもできたんです。
 【藤沢】すごい、完全に「先生」ですね（笑）。やむなく引き受ける
 にあたって、戦略的なものはあったんですか？
 【藤沢】まず、「自分が作家である」ことを忘れないようにしよう（笑）。
 アカデミズムの言葉ではなく、現場で書いている人間の言葉で、
 文学や文章表現を教えよう。それと、禅仏教の「無の世界」
 とか西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」とか、ほくが浪人
 時代に学んだ「自分の言葉のゼロ地点」についてやっている。
 文学とゼロ、その両極を整理しながら教えるのは、自分にも勉
 強になるかなと思って。
 【藤沢】その両極で、教える側は引き裂かれませんか？
 【藤沢】これが意外にいいバランスなんです。小説ではほくは、
 究極的には「あるがまま」を描写したいんです。主
 体と客体を、言語の介在なしに一致させたい。
 自分すらも存在しない、みたい。でも、いざ

小説を書くと、登場人物が出てきて物語が生まれて、どうしても動き
 出してくるでしょう？ そのとき、主人公の「主客合一」、というか世
 界の描写に重点を置きすぎると、物語が動かなくなる。だから、観
 察の基本として「主客合一」をおさえながら、書くときはそれぞれの
 キャラクターにあわせて世界を見る、その両極なんです。
 【藤沢】そういう藤沢さんの問題意識は学生に届いていますか？
 【藤沢】世界との駆け引きを学ぶための「日本文化論」では、主要な
 テキストとして西田幾多郎の『善の研究』を使っているけど、それ
 だけではわかりにくいから、武道、禅仏教、茶道それから弓道、能、
 あるいは川端康成や谷崎潤一郎……いろんなエレメントを使って、
 無とはなにか、悟りとはなにか、のアプローチにしています。もち
 ろん、俺自体も「悟達」など分からないけど。
 【藤沢】そのエレメントは、教えるために持ってくるんです
 か？ それともそもそも藤沢さんのなかに志向して
 入っていたんですか？
 【藤沢】半分以上、入ってるかな。幼い頃から
 ずっと武道をやってるんだけど、武道って、
 自分を滅却しないと相手の攻撃に反応で
 きないんです。その意味で、禅仏教と



藤沢周